

ち
知え
恵わ
環Chienowa
net

ねっと

Vol.47

2011年
1月20日発行

■発行

環境ネットワーク・文京
〒113-0034 文京区湯島2-14-9URL <http://www.en-bunkyo.org>☎03-3837-1901 〆03-3837-1901
■E-Mail sawatan@at.wakwak.com

日本独自の「自然と共生する社会」を目指して

～21世紀社会デザイン研究学会 第5回年次大会から～

跡見学園女子大学教授 宮崎 正浩

日本は、長い歴史の中で自然と共生する社会を形成してきました。しかし、戦後の都市化によってそれらが崩壊し、その結果人々は孤立し様々な社会問題を引き起こしています。

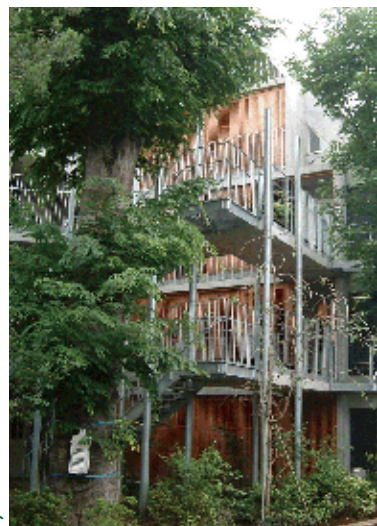
昨年（2010年）12月4、5日に「21世紀社会デザイン研究学会」の第5回年次大会が跡見学園女子大学（文京区大塚）にて開催され、「自然と共生する社会」をテーマとしたシンポジウムが行われました。本稿では、その概要を紹介させていただきます。

最初に、哲学者である内山節氏（立教大学教授）から、群馬県上野村という山村での人々の生活を基に、日本人の伝統的な自然観について語っていただきました。日本の農村社会では、人と自然を分ける考えはなく、自然から離れて自我を持ち、金や名声などを求めることが不幸の原因であり、そのような自我を捨てることが悟りであるとされてきました。農村では、自然は社会の構成員であり、また、現に生きている人だけでなく、死者もまた（先祖として）一員であり、社会を守ってくれる存在であったとのことです（祭りは、先祖や自然を神々として呼び込む儀式でした）。農村での古い時代からの風習や景観は、自然に形成された美しいデザインとなっています。日本人は、そのような文化と景観の中で、心地よい満足感に浸ることができます。これからの社会は、そのような日本古来からの自然観を基に、人間と自然の関係をデザインしていくことが重要なのです。

この後、NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議の村上千里氏から「持続可能な開発のための教育」、株式会社チームネットの甲斐徹郎氏の代理の方から、都市において自然と共生するコミュニティを作る集合住宅である「樺ハウス」の紹介

がありました。さらに、跡見学園女子大学の吉村英子氏からは、自然と共生する社会を築くための「これからのモノづくりと暮らし」について、立教大学の中村陽一氏からは、「コミュニティデザインとコーポラティブハウス」について語っていただきました。

以上のディスカッションを私なりに総括してみます。日本人は人間と自然が一体であるという自然観を持っているとの指摘は、人間と自然を対立的にとらえる欧米社会での自然保護の議論と日本国内での議論がかみ合わない場合があることを理解するための重要な指摘だったと思います。また、日本人は伝統的な農村文化と景観から心地よい満足感に浸ることができるとの指摘は、現在の日本で田舎暮らしをする人が増え、都会の中で自然を取り入れたコミュニティを作る動きが出ている理由を説明していると考えます。以上のことから、今後の日本では、日本人の自然観への理解を基に、市民が社会デザインに参加し、日本独自の自然との共生社会を作っていくことが課題なのではないでしょうか。今回のシンポジウムは、私たちが、今後のコミュニティ作りにどのように取り組んでいったらよいかについて多くの示唆を与える有意義な会議でした。



樺ハウス（世田谷区）

写真提供：株式会社チームネット



文の京の今昔

ENB会員 青木 義久

我が文京区は、大都市東京の中でも18校もの大学が集中する特徴ある行政区で、ご承知の通り、別名を「文の京」とも称されています。

その経緯を歴史的に辿れば、明治新政府の「文明開化」、即ち西洋学術を迅速に吸収せねばならぬという大方針に遡ります。そしてその文明受容の方法は政府と大学に多数の外国人を「お雇い」として雇うという手段で行われたのです。例えば、明治7年(1874)の工部省の予算の33.7%が外国人の俸給だったほどで、財政難のなか新政府は高給で西欧各国から優秀な外国人を招聘し、結果として彼らの多くが本郷に集まります。

旧加賀藩には17棟もの西洋館が立ち並び、木立の中には突如西洋人居住区が出現しました。当初、政府は大学東校(医学部)を上野の山に建てる計画でしたが、オランダの軍医ボードンが「大都市には公園が要る。上野の木は切ってはならない」と主張して、お雇い外国人の居住区と病院は本郷台の加賀藩邸跡に決まるとされています。

フェノロサ(美術)、E・Sモース(考古学)、E・Vヘルツ(医学)、Gワグネル(理化学)など、その後に各分野を指導した著名人がここの住人となります。彼らが教鞭をとる東京大学(帝大)には全国から若き秀才が集まり、外国人から新しい技芸を学び、その後日本近代化を先鞭していったのです。司馬遼太郎がその著「街道をゆく」(本郷界限)で著わしたように、日本が西欧文明を吸収していく中で、その全国への配電盤の役割を担ったのが当時日本で唯一の東京帝国大学でした。

法・文学部、理学部などが移転を終えた明治19年に文部大臣森有礼は「学校法」を制定し、東京師範学校や第一高等学校なども文京区に設置され、この頃より跡見女学校、郁文館、哲学館(東洋大学)など私立学校も続々と設立され、こうして東京で唯一の文教地区が形成されていったのです。



こうしたさ中の明治17年、有坂紹蔵、坪井正五郎、白井光太郎の3人が弥生町の貝塚から縄文式土器でもなく、土師器(高温で焼く土器)とも異なるみごとな球形の壺を掘り出します。やがてこの土器の類例が各地でも出土し、縄文時代と古墳時代の間をつなぐ期間に使用されていたことが判明し、「弥生時代」は正式な時代区分として認められ、弥生文化、弥生土器など「弥生」の字は広く全国に普及していきます。

2001年には、東京大学工学部敷地内から方形周溝墓が発掘され、そこから出土したガラス小玉が分析の結果、それがカリガラスあることが判明します。従来、日本全国から出土するガラス玉は全て鉛ガラスでしたから、大変な驚きでした。カリガラスはBC300年頃にインドで生産され、西暦前後の南

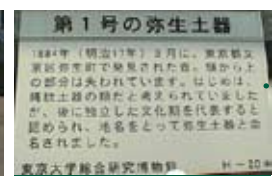
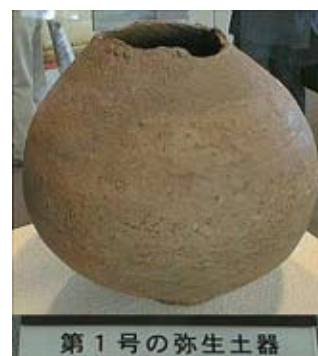
中国の遺跡から出土した例があるだけの珍しいモノで、何故、その珍しいガラス玉がこの地で出土したのか、どのような経路で渡ってきたのか、謎は深まるばかりです。

この不思議な弥生人が去った後、本郷のこの地は永く未開の地となります。古墳時代の関東の政治・文化の中心は上野毛(群馬県)に在り(古墳が8,433基も)、奈良・平安期での農業開拓も主として多摩川以西で進み、その東端(文京区)は狐が跳梁する原始林の時代が続き、この地が歴史に登場するのは太田道灌の江戸城築造(1457)からなのです。彼は江戸から重要な軍事拠点とした岩槻城の間に直線的な軍用道路を建設します。それが今の本郷通り(岩槻街道)で、この頃になって農地も増え、農民の散在が認められます。

家康が江戸幕府を開くと、ここ一帯の農地や森林が召し上げられ大名屋敷や寺院用地となりますが、まだ農地と森林が大半でした。やがて江戸の人口が100万人を超え、幕府は上水道の必要に迫られ、神田上水や玉川上水を完成させて都市らしくなったのです。

しかし、難題も多く、ゴミ処理は明暦大火後に幕府は深川の先の永代浦まで船で運ぶよう指示を出し、以後現在まで東京湾の埋め立ては続くことに…。江戸は何度となく大火に見舞われたのですが、その残骸もすべて東京湾に運ばれたのです。ただ糞尿だけは幸いにして近郊の農家が大切な肥料として引き取ってくれたため、下水道の悩みはあまり無かったのです。ただ、江戸期の文京区は武家地(藩邸)の占有率が高かったため、明治以降にこれが幸いして、学校、病院、公園などの用地に転用され、多くの緑と池を残すことができました。このことは歴史的に裏付けられて大きな観光資源ともなりました。

これからの文京区を考えれば、住民の住みよい町であることは当然として、多くの人々を引き付けるための魅力ある都市造りも欠くことができません。電柱の地中化、サイクルレーン、そして水辺の広がりなど考えられる事は沢山あります。今や道路の下で暗渠となった藍染川や小石川(千川)の清流を1区間でも取り戻すことは不可能でしょうか。ただ、現在はお茶の水寄りの神田川だけが僅かに憩いを与えてくれています。



1884年(明治17年)3月に、東京都文京区弥生町で発見された壺。頸から上の部分は失われています。はじめは、縄文土器の類だと考えられていましたが、後に独立した文化期を代表すると認められ、地名をとって弥生土器と命名されました。

東京大学総合研究博物館

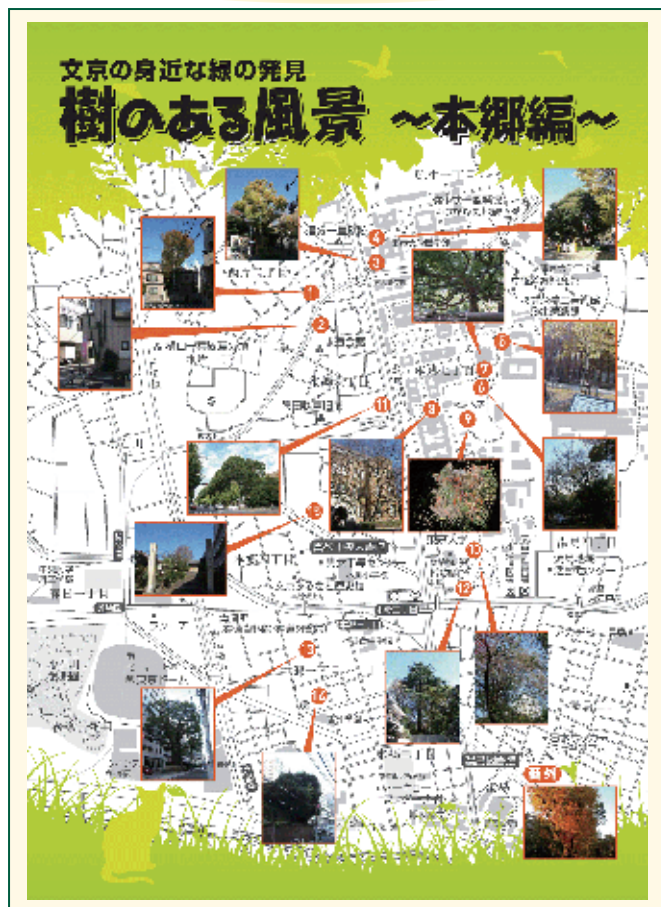
受講生の発表!!

環境学習リーダー育成講座受講生が、
ステージ・エコで受講の成果を発表しました。

地域における環境活動のリーダーとなる人材を育成することを目的とした講座です。
22年度は『“みどり”をきっかけに環境について考えていこう』をテーマに取り組んできました。

受講生が2つの班に分かれて、みどりに関する本郷と伝通院のコースを作成しました。
作成したコースを写真などと一緒に地図にし、来場した方々に紹介しました♪

本郷コース



伝通院コース



このページに関するご連絡・お問い合わせは、文京区 資源環境部 環境政策課 地域環境係へ

TEL:5803-1828 FAX:5803-1362

文京区ホームページアドレス: <http://www.city.bunkyo.lg.jp/>

La Niña現象と洪水

オーストラリアで迎える3度目のお正月はLa Niña現象(ラ・ニーニャ)による大雨とそれに伴う洪水被害の真っ直中で迎えました。La Niña現象とは、太平洋の赤道域において、太平洋の東側(南米のペルー沿岸)から太平洋の中心付近(日付変更線付近)にかけて海面水温が平年より低くなる現象です。太平洋東側の海域水温が低くなることで、太平洋上空を東から西に向かって吹く貿易風の勢いが強まり、太平洋西側のインドネシア近海に多くの雨をもたらす積乱雲が多く発生します。この積乱雲は、私が暮らすオーストラリア・クイーンズランド州にも多くの雨を降らし続けています。日本の5倍の面積を持つクイーンズランド州ですが、現在、実にその75%が洪水の被害にあっています(news.com.auより)。洪水で家、家族、友人、家財などを失った方々の悲しみ、家や橋が濁流に飲まれて流されていく光景の恐ろしさ。早くこの洪水が治まってくれることをただただ祈るのみです。私は今回、こうして洪水の最中に立つまで、洪水の被害とは「物が流され、失われること」にあると思っていました。しかし、今回、それだけではないのだと気付かされました。流されたものはどこへ行きつくのか?海です。倒壊した家屋、車、コンクリートの塊、ドラム缶・・・流れたものはゴミと化し、河口に溢れかえる。農薬を含む土砂は遠洋まで流れてしまうことでしょう。クイーンズランド州が誇る美しいグレートバリアリーフは、今、破壊の危機に瀕しています。

「文京ボランティア祭」での貴重な体験

日本女子大学 物質生物科学科4年 鈴木美佳

今回「文京ボランティア祭」に参加し、大変貴重な経験をさせて頂くことが出来ました。「再生紙でリサイクル名刺を作ろう」という企画でしたが、ご来場くださった地域の皆さまとお話したり、多くの子供たちと触れ合うことが出来たりと、私自身にとって刺激的な一日となりました。この企画は、これまでも何回か実施されてきたそうですが、以前にこの企画を体験された方が、今回もまた私たちのブースに来て下さった例もありました。そして「また来年もお願いね」と言ってくくださったのはとても嬉しかったです。

私は大学で環境に関する研究を行っていますが、そうした研究内容を、地域の方々に直接認識して頂く機会はほとんどありません。環境に携わっている私たちがこのような身近なエコ活動に参加することで、社会にエコ意識が広がっていくのだなと感じました。

私はボランティアに参加すること自体が初めての経験でしたが、多くのことを学ぶことができました。今後もこのような機会がある際には是非参加させて頂き、少しでもエコ活動を広めていきたいと思っています。貴重な体験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

地球温暖化に関する環境教育プログラムに参加して

東洋大学 経済学部第1部経済学科4年 市原和佳

環境教育の中で触れ合った子供たちを見て強く感じたことは、子供たちの純粋さでした。普段、小さな子供たちと関わる機会はあまりないからなのかもしれませんが、小学5年生の子供とはこんなにも純粋なものだったかと驚きました。温暖化による地球環境への影響を学んだ際、子供たちが「怖い、嫌だ」と叫び、「何とかならないの?」と不思議そうに尋ねてきたことが特に印象に残っています。

私は正直なところ、具体的な温暖化対策をしているわけでもなく、またそのことに対して罪悪感もありませんでした。それどころか子供たちと同じ資料を見ても特に恐怖を感じるでもなく、その事実を何とか納得し受け入れようとさえ考えていました。

子供たちはその事実を「怖い」と認識し、何とかしたいと純粋に感じていました。子供たちの持つその純粋さは、これから先きと訪れるであろう、あらゆる面の変化に対し不可欠なものに違いないと思います。

子供たちは純粋であるが故、あらゆる影響を受けやすく、その全てが正しいものとは限りません。そのため、今回大塚小学校で行った環境教育のように、子供たちの視野を広げてあげられる様な教育はとても有意義だと感じました。

東洋大学 法学部4年 石川絵梨香

「環境教育」と聞いても、子どもたちに対して私が何を教えられるのか初めは不安でした。しかし、私にとってこの環境教育は「教える」というより、彼らと共に「学ぶ」授業でした。授業を終えた今、環境問題についてより前向きに考える自分を感じています。

印象的だったのは、環境教育を通して気づいたことを子どもたちが発表したときのことです。「何も分からない」と鉛筆も取らない子がいました。しかしその子は、電気はどうするのか、私たちの電気使用量はどう変わったか、などと質問すると自分の言葉で答えられ、最後は堂々と発表していました。授業の内容には大学で習うようなものもありましたが、小学生の吸収力には驚嘆しきりでした。

また、ある発表の中に「未来は変えられます」という言葉があり、未来の地球環境をよりよい方向に引っ張っていってくれるような力強さと可能性を感じました。

テレビの時間を1時間だけ減らしてみる、家電を買うときに省エネ製品を選んでみる、LED電球を使ってみる。一人では解決できない問題だからこそ、一人ひとりが行動することで「未来は変えられる」のだと感じました。今回の環境教育は、そのことに気付けた貴重な経験です。

東洋大学 経済学研究科環境コース ユ・ジンジェ

私がボランティアをしたのは、文京区立大塚小学校。小学5年生の環境教育授業です。ボランティアの初日、留学生である私は日本の小学生との接触は初めてなので、わくわくしながら、自信はありませんでした。しかし、私の不安が子供たちの笑顔に吹き飛ばされ、教室に響き渡る拍手から最後まで頑張り続けるエネルギーをもらったことは今回活動の第一印象でした。

小学生時代から環境教育を積極的に取り組む日本の教育に関心を持つと同時に、大学生になって初めて環境問題について考えた自分が恥ずかしく思いました。小学生たちと同じ立場のつもりで授業を受けてみましたが、知識を得るだけでなく、かなり面白い内容でした。

授業内容は従来のエネルギー家庭用品の比較です。家族三代のエネルギー商品の進化から、小学生たちに時代の流れを感じさせながら、エコの重要性を身近のものを通じて分かりやすく教えました。

私は環境保全について皆さんの感想を聞き、フィードバックをし、一緒にプレゼンに臨みました。小学生のレベルとは思えない発表で、皆さん一生懸命に地球さんの健康を考えた真剣さそのものでしたね。

環境保全の実現に向けて最も重要なのは教育だと思います。その第一歩は地球の未来を担う子供の環境教育です。今日の努力は必ず明日に繋がっているのが子供の満足の笑顔から分かったこのことが、今回のボランティア活動を通じて私自身の成長だと思います。